長崎大学全学同窓会広報

「輝く母校 長崎大学のために」

長崎大学全学同窓会会長 井石 哲哉
（医学部 昭和31年卒）

昨年、母校長崎大学卒業生の下村博士がノーベル化学賞受賞という開学以来、最も輝かしい偉業を達成されました。年末のストックホルムにおける授賞式報道に卒業生はもとより母校の教職員、学生諸君は誇らしく感じながら接したものと思料しています。

同窓生の皆さんは今回の偉業によりお気づきのことと思いますが、母校長崎大学が個性豊かに輝くこと、社会から評価されることは同窓生にとって大きな自慢であり、誇りであり、大きな喜びであります。同窓生は母校が輝くこと、評価されることを心から願っており、その可能性があるのであれば物心両面の協力を惜しむものでないと想うのは、私のみでなく同窓生共通の思いであると確信しています。

長崎大学全学同窓会は平成17年に設けられましたが、これまでの活動としては卒業式当日の各学部同窓会長等が一堂に会する場において、母校の学長からの活動状況の報告のみで、各学部同窓会長の皆さんは何かもの足りなさを感じられていたのではないでしょうか。全学同窓会の活動を本格化することが課題となっていましたが、このたび母校の本部と協議を重ね、母校幹部と同窓生及び同窓生間どうしの懇談の場を設けること、母校の活動状況等を定期的に広報誌等によりお伝えすることを確認しました。そして、各学部等同窓会の全面的なご協力を得て、本年3月7日から国立科学博物館で開催される「長崎大学企画展」に合わせて、東京での懇親会を開催する運びとなりました。

母校長崎大学は、平成16年度から国立大学法人として生まれ変わり、国に依存した組織から脱却し、自主自律的な社会的存在として確かな歩みを始めています。母校が個性輝く大学として発展するよう同窓会は大きな期待をもって見守り、また可能な支援を行っていきたいと強く感じています。その上でも、このたびの同窓会活動の一環として東京にて懇親会が開催されることになった意義は誠に大きいものがあります。同窓生みんなで母校の応援団になりましょう。

経済学部

教育学部（改修工事中）

医学部

歯学部

東京で長崎の輪を拡げよう

長崎大学名誉校友
日本放送協会会長（経済学部　昭和32年卒）
福地　茂雄

昨秋、長崎市の田上市長からお電話を頂いた。要件は、今年の2月1日に「游学のまちフォーラム」を催すので基調講演をして頂きたいとの依頼であった。長崎市と市内の8大学が一体となって長崎のまち全体が学びの場となるような游学の地づくりを推進しようという意図からのものだった。

これまでも長崎市内の各大学が連携してサテライト教室を設けたり、単位の互換制度を導入したり、新しいコラボレーションの在り方を進めてきたが、あくまでも大学同士の連携であったものに、今回は行政も加わってまちづくりをしようというものであり、私も大賛成した。しかし、その前に、我々の長崎大学が、総合大学として各学部の強みを活かしたコラボレーションが必要だと思われる。その意味から、長崎大学の全学同窓会の動きが活発になることは大変好ましいことと思う。

長崎大学は総合大学とはいうものの、環境科学部を除き各学部が独立した専門学校であっただけに、学部歌、学部旗など独立志向が強く、総合大学の学風は極めて希薄であった。全学が一体化するのは入学式と卒業式くらいではなかっただろうか。これまではそういった学部ごとの強い個性が学生を引き寄せてきたと思われるが、今日では学部単独の個性、魅力に加えて総合大学としての評価のウェイトが大きくなってきていると思われる。既に学部間のコラボレーションは色んな形で進められているが、一層の全学体制が求められる時代だ。

今日では、色んな分野で分化や機能の融合が進んでいる。大学における理系と文系という分類は既に明治の遺物と化し、情報の分野でも通信と放送の融合が一挙に進んできた。そんな矢先に長崎大学に全学同窓会が結成され、今回初めて東京での懇親会が開催される運びとなったことは、大きな前進だと思う。

大学側のこういった前向きな取組に応えて、私たち各学部の卒業生も積極的に参加し、初回会合をぜひとも成功させたいと思う。初回の盛会が次の盛会へと繋がると思う。次は、各学部同窓会の東京支部間が連携を取り合って、相互の支部総会に幹部が参加してはどうだろうか。東京で長崎の輪が拡がってゆくことを期待したい。

薬学部

工学部

水産学部

環境科学部

長崎大学全学同窓会懇親会開催によせて

長崎大学長　片峰　茂
（医学部　昭和51年卒）

長崎大学は、本年（２００９年）、戦後の新制長崎大学の設置から60年、そして国立大学法人長崎大学に移行して６年目を迎えました。この間、10万有余に及ぶ青春を見つめ、才能を育み、そして有為の人材を輩出してきました。そして幾多の研究業績により社会に大きな貢献を為してきました。過去には、大学の行方を大きく左右する試練もありましたが、その時々の構成員の知恵と努力で乗り切り、今日に至っています。例えば、１９６０年代後半には学生会館の管理運営をめぐり大学と学生の対立が激化し、長期にわたり学舎はバリケードで封鎖され授業も行えず、キャンパスは喧騒に包まれました。１９９０年代にはキャンパス移転が画策され、移転賛成派と反対派に学内が二分され対立しました。昨今の若者の価値観や行動様式を考えれば、市街地から郊外（田舎）へのキャンパス移転などありえない話なのですが、当時は真面目に議論されたのです。

そして、２００４年の法人化です。従来の文科省親方日の丸・横並び管理方式から、法人化により各大学は自由度を付与され、独自の個性を創出・発展させ、競争することが可能になったのです。国の行財政改革の一環としての運営費交付金及び人件費の削減が法人化とセットになって出てきたこともあり、大学にはシステム改革が、教職員には意識改革が強く求められています。

法人化により、大学の管理運営形態も大きく変わりました。従来の部局の独自性に基づく裁量を重視した教授会自治から、学長を中心とした役員会による管理運営方式に移行したのです。形の上では、長崎大学は部局（学部）の集合体から、真の意味での総合大学（知の共同体）へと進化したということができます。現在、その実質化のためのさまざまな努力を行っているところです。その一環として、４年前、各学部等同窓会にお願いして、各同窓会の緩やかな連合体として長崎大学全学同窓会を結成していただきました。来たる３月には、東京上野公園の国立科学博物館における長崎大学企画展「アフリカの自然・開発・そこに住む人々―地球の家族を救う国際協力―」の開催にあわせて、長崎大学全学同窓会懇親会（東京）を開催させていただきます。東京とその近郊に在住の皆様と直接お会いしお話しできることを大変楽しみにしております。

いま、長崎大学は旧体制からのソフトランディングを果たし、何とか国立大学法人第一期の中期６年を乗り切ろうとしています。そして、第二期の中期における新たな飛躍へむけて助走を開始したところです。社会に眼を転じると、米国発の経済不況が世界を覆い、地球規模の環境破壊、食糧危機や感染症のまん延が人類の存続すらも危うくすることが認識されつつあります。日本も停滞からなかなか抜け出せませんし、長崎の地にもまだまだ光がさしてきません。

今ほど「新しい価値観と人材の創造」という大学の役割の重要性が増している時はないのではないでしょうか。地方分権の先陣を切るのも教育研究分野でありアカデミアだと思います。長崎大学はさらに世界に突出し、かつ地域に根付き、その役割を果たしていく必要があるのです。そういう矢先、大変うれしいニュースが飛び込んできました。本学の大先輩下村脩先生のノーベル化学賞受賞です。長崎大学にとって大変な誇りであることはいうまでもなく、ノーベル賞を身近に意識することで勇気づけられ発奮した後輩の研究者も多かったものと思います。下村脩先生の偉業を本学の新たな伝統の創造に繋げていきたいものです。

卒業生（ＯＢ）の先輩たちこそ長崎大学の最強の応援団です。時には母校の教育研究の動向や後輩たちの頑張りに目を留めていただき、そしてご支援、ご指導、叱咤激励いただければ、幸甚の極みであります。

大学病院

熱帯医学研究所

文教キャンパス正門周辺

文教キャンパス正門

編集後記

平成16年4月1日、長崎大学は国立大学法人長崎大学として新しく出発しました。

これを機に、平成17年10月、各学部等同窓会の連合体としての「長崎大学全学同窓会」が設立されました。設立の目的は、会員相互の親睦を図り、併せて母校との連絡を緊密にし、もって長崎大学の発展に貢献することとしています。

この度、各学部等同窓会の多大なるご協力を得て、東京での懇親会を開催することとなりました。お世話いただきました各関東（東京）支部長様には厚くお礼申し上げます。

全学同窓会は設立後間もない組織ですが、今後定期的に情報を発信するなど、長崎大学と同窓生の一体感の醸成に努め、これからも支援を行ってゆく所存です。

同窓生の皆様におかれましては、全学同窓会の設立趣旨をご理解いただき、できるだけご支援賜りますようお願い申し上げます。

平成21年3月発行
編集・発行　長崎大学総務部総務課